

## 空手のこと

試合形式の誕生と、連盟の成立によって、世界の空手は著しく普及し、その人口は広義に解釈すれば3000人ともいわれている。無論、人数がそのまま価値ではないがこれを実際に行動し貢献したのは流派と町道場校のOB各個人である。又、日本本州に空手が正式に伝わってから試合制度の歴史が半分を大きく越えるようになってしまった。また事実、空手も見ようによっては大きく変わり、試合を見るだけでは流派は判りにくく、試合内容や技も大きく変わり、ここ6、7年素晴らしいと思える選手も少なからず現れている。組手の上では流派の希薄になってきた。

武道という言葉は江戸時代の末期に生まれたものであるが、これより更に500年ほど前の鎌倉時代に生まれ武士道との関連が深いことは間違いない。空手に限らず格闘を以てする武術が武道かスポーツかという議論長く続くわけだが、私達は学生時代には武道とは命懸けでおこなうものであり、スポーツとは楽しむものという教りかたをし自分自身も真剣に稽古を行うことを以てそのように信じ、又、思い込もうととする気持と自負を持っていた。スポーツでは練習というが武道では稽古と言って朝から終日起居を正し、歩くにつけ座るにつけ仮想するよう心掛け自らを律するよう心し、少し満足もした。それが学生から社会人に移り日本にも世界にも、現在にも過去にも次第に目を開いて知りはじめるとスポーツも決して武道に劣ることなく真剣に練習に明け暮れていることを知る。合理思想、現実主義的な面で感覚的に多少の違いがあっても観念的に異とするには当たらないと思うに至った。

只、一般には現代日本には、武士道的或は武道的生き方は精神的にも思想的にも欠けるものがあり、日本固有の文化のひとつとしてこれらを心して持ち続けなければならないと思う。近時十年ほど、日本で教育基本(昭和22年3月施行)の問題点が特に指摘されるようになったが、人間としての信義、(律儀、俠気、嘘をつか約束を守る、など)物事を一生懸命やる、親に孝、正直、親切、勤勉、そして愛国、家庭愛、正義観、責任観などれをとっても人間の第一の基本であるべきものが欠け日本民族と国家の重要問題として甚だ憂慮される。尚、現行教育基本法の民主、平和、福祉、個性、創造、文化、正義、責任、自主、自発も共に重要であること疑う余地はない。要は、武道、スポーツ共に端的に一面で捉えるものでなく人間の基本的に持ち備えるべき目を見開いて広く見る心掛けが重要なのだと思う。私達は戦前から戦中に育った言わば戦中児であった。戦争経験は空襲しかなく実際の戦争の過酷さ凄惨さは知らず、戦後の書物や映画などでは徹底した戦争否内容が殆どだったが一方、戦中は勿論戦後も戦争を純化し美化したものも少なくなくその影響を少なからず受けたことは否定出来ない。私自身は戦後十年ほどは「日本という国の為に死ぬことが出来るか」をいくらか真に考えていた。又、学生時代は自分の基本を「慶応義塾体育会空手部の為に」を先ず第一義に考え続けていたそれは自分が強くなること、部員皆を強くすることと考えていた。そして部員全体に部を強く愛するようになっていた。この二つであった。このようなことを書くのは卑近で失礼であるが日本にこんな時代もあったという事後の空手の人たちに伝えておきたいという気持からである。そして又、その後現在まで空手部に多分に共通純な心が繋がっていると信じている。

立ち方では各流のものは残っているが、立ち方では高木さんが指摘されている通り、前屈の後ろの膝を完全伸ばしてしまうことが武道として、或は格闘武術として問題でないのか、後屈の後ろ足の足先を外に直角に向くこと、前足或は後ろ足の裏をかかとまで全て床につけてしまうこと等等、今一度既製の概念から離れてフラに考えてみる事が是非必要である。他方、引手の位置では、大先生は腰骨の位置であったが船越義豪(よし先生(後記))は脇下の乳の横の位置を、慶應への出稽古でも主張し指導しておられた。剛柔流では肩に力が加る程度に胸横に向かって引く。糸東流では腰骨の上。和道流は若干腰骨より高い。沖縄の少林流も胸横で引く。又、上記で解る事は余り細かく規定してはめ込まずに一定の基準を示して後は、各人の体の持ち味に合わせその判断に任せている。全体的に立足の足幅を縦、横ともやや狭くすることが方向として正しいのではないが以上がそれぞれ自ら流派を開いた方々の研究の結果であり、空手に対する基本的考え方である。

立ち方で一つ不思議と思えるのが松涛館に猫足立ちがないことである。これは我々から見ても、受けに最も切な立ち方であり、受けのあと、体の移動にも、防御にも、攻撃にも最も適していると考えられるが船越先生によれば本州に伝えられることはなかった。しかし、沖縄では昔から松涛館意外の全ての空手で最も基本的な立ち方(

一つと考えられており、長嶺師の著書には、八字立ち、自然立ち、閉そく立ち、に次ぎ猫足立ちが四番目に説かれており、「猫足立ちは昔から自然体立ちの動作と同じく重要視され、首里手、泊手、那覇手を問わず、これ系統の形にも多くとりいれられている。と記されて居り、「猫足で行う前進、後退、転身の足捌きに足蹴り、拳突受け技を組み合わせて毎日の稽古に四、五分間基本鍛練として活用すれば、空手の妙味と自力の養成に大寄与するのである。と。そしてこの鍛練こそ、角力の鉄砲行と剣道の打込行の稽古同様に最も重要なもので、武道としての空手道を深く研究する者には見失ってはならない事柄である。」と書かれている。私もこの考えがよく理解できる。勿論本州には宮城長順師、摩文仁賢和師、上地完文師達によって最初から伝えられているが、松涛館空手では何故か伝えられなかった。

僭越ながら私は引手は、何処から何処へでも、即ち突きを行う時に引き手となる手の在る位置か、3センチ程度十分と考えている。引き手は常に次の攻撃手となり、受け手となり、更にカバーとならなければならない。因に方についても考えを申し上げれば、前屈は縦の歩幅を現在より狭く、前足膝は浅く、或は深く状況に応じて曲後足先方向は極力前に向ける事が好ましいが極度に無理してまで前に向けることなく、前方向を意識しながら置き、但し特に必要な時以外は45度以上には開かない。後足膝は軽く曲げ、必要に応じて真直ぐの場合を含曲げ角度の浅、深を本能的に必要に則して変化させる。後屈は前足の裏は床に付けるか、状況によってはかかとを上げ腰をやや後ろに引き猫足の要領でふところを深くすることも必要であり研究の対象となる。但し、腰から上の上体を後ろに反らすことはしない。

以上勝手を申し上げましたが、これはこれから試合制度に生きる人への意見であること。第二に初期の基本確り身に着けるべき時期は上記のいわばくずしたかたちに至る以前に初期の基本となる稽古を確実にを行うこと前提である。それは、やはり腰を落とし突く瞬間には確りと引手を引き、肘を確実に伸ばし体全体を同時に決まず、決め威力を覚え身につけること、足腰も鍛えるべき事と思う。これら初期の基本となる段階の稽古は目的目標として期間を2年間程度とし、以後は5～10分程度を毎日続ける。

## 空手のこと(組手)

組手では実際に試合に近い状態での組手の基本形を造りだし、勿論それは従来的一本組手より遥かに試に近い実際的なもので、且つ、連続的な攻撃の行使による約束組手の形でなければならない。これを具体的にば、攻撃側は定められた2か3の攻撃手の技を可能な限りの速度で連続的に実施し、受ける側は之を受けて決め手を入れて一本取る。双方がこれにかなり慣れた段階で攻守を入れ替える。更に慣れた段階で攻守それぞれの手を各自が自ら決めたものに変化させる。但しこれは行使する前に事前に相手にその内容を伝えなければならない。ほぼ、最終段階では攻撃側、受ける側と分けずに、双方が相手の隙を見た瞬間に攻撃をしかけ一層り度を高める。之は又、相手の隙を発見し見極めること、次の瞬間に有効な攻撃がスタート出来ることにも慣れ但し、一定の熟練を要する。同時にこの段階では、攻撃手、受手についても各自の研究と進歩によって試行を経て新しい手を生み出すものとする。又途中の段階で攻撃側は受手が十分に受けられない場合は攻撃手3で終わることなく更に連続攻撃して勝ちを取って差し支えない。尚、この組手形の場合は使用するグローブ通常の試合用のものよりも一定の検討期間を経て後に大きいものとし、更に、双方一層注意を徹底して危害を期する。以上のように過去の形にとらわれない稽古上可能な限り実際に近い効率的な組手形を各自の研究経験を加えながら開発する。従来欠陥と考えられるほど経験が生かされず、又研究が具体的に進められていなかったカバーや実際上の防御も進歩させなければならない。

上記を反復して稽古を重ね、身につけ、基本に則した効果を持つ決め手が試合に則した組手の場で有効に可能となる事を一貫した、目的、目標とする。又、空手にはどういふ訳か力防御が無い。足では金的の防御どもなくはないが、手で打ち合う武術としてはボクシングがあればほど防御を意識し稽古を實踐している(見ても、又、空手の試合で防御をすることを知らぬか、やらぬかで当てられて怪我を負う物を見るのが口惜し又、防御せずに怪我を負った選手が其後も一向に防御で改善、進歩しない者が多い。

以上未だに空手に防御の観念が乏しい事が不思議ともいえる。

昔は組手の機会が現在と比べてかなり少なかったことでもあり経験と必要性からも研究して改善することもまなかったことかも知れぬがこれは武術本来の要素である上、直ちに次の連続攻撃を行う為にも、顔面その

危害予防の為に引き手の位置と同様に研究し習熟を進め、身に習慣的に記憶させる必要がある。

又、蹴った後の足をいかに早く床に下ろすか、蹴ったあとの足、ひざを中段に維持することはカバーの意味がゼロではないがこれは主目的とは考えられない。これは明らかに不安定であり隙も多く非格闘的である。私は学生時代から飛び蹴りなどの場合、片方の足を極力伸ばして少しでも早く床に着けられるよう次の動作への意識をしていた。伊藤俊太郎さんは組み手を自ら研究され、合理的に造り出し、対峙する相手との「線」。手、ある位置から相手の狙い場所へ直線で行う攻撃。スピード。その他突き手、蹴足の立ち方の始めから終わる迄、足の動きの無駄のなさ。歩幅と体重の移動法。突き、蹴りの破壊力。本能的な抜群の動きと体の移動。相手と接触した瞬間の身のこなし。打ち合った時の野獣の気性。どれをとっても最高のものであった。そしてその全てが統合され一致された不世出とまで言われた方であった。常に「空手は感と腹とスピードだ」を強調しておられ徹底して合理に徹し形式を排された。また高木さんも同様であった。そしてお二人は各校OBの方々からも最信頼が高かった。

伊藤さんの著された「空手」と言う只、二字の本がある。全て組手である。殆ど全てに手の一つ一つの写真が入りである。その全ての手は相手と実践してご自分で研究、思案された結果である。このような空手の本を見べきと思ひあつた。技の巧拙、経験の如何ことがない。しかし近時、慶應の選手の空手は「気」に欠ける。**今年も委員の依頼で「拳報」を書くとき、これを書くを問はずこの「気」、つまりどんなことがあってもくじけず、不屈の精神と意志で、一本取って勝つ。このことである。身を捨てて体ごとぶつかってゆかず、全てを賭して、審判が一本を宣する迄、その声を耳にするまで、絶対に攻撃を連続でし続ける、その「気」と実行がなくて何で勝ちを制することができるものか。**

慶應の試合を見ていて、試合に燃え尽きるような情熱、真っ赤な炎のような闘志、何者をも砕いてやり抜きを達する巖のような気力と意志が、体全体から溢れ出るものを見せてもらっていない。これがあるからこそ、審判も観客も自ずから勝利の一本の手が挙がるのだ。勘違いしてはいけない、**小手先の技や、相手を圧倒し抜く**も射通す絶対の気力のないものに勝利はない。これを確りと身につけてこそ慶應義塾体育会空手部なのだ。尚、部を強くするには残念ではあるが、現代はAO制度の活用が必須である事を確実に認識し具体的対応計画、立案、実施する必要がある。之に限らず常に意識を持つ処に、何かに触発して発想と進歩が生まれる。又、慶應の一環教育の長所と利点をより積極的に生かして活用する他ない。やはり空手も考え方を既製概念一つに固定せず弾力的に複数の視点による変化を遂げて行かないと、研究を強く進めてゆく処の後塵を拝すこととなる。以上重要なことのみ。これは私の一OBとしての意見である。

## 空手のこと(形)

空手の形は空手の特長の一つである。昨今、女子の形がしばしばテレビで紹介されるようになって友人から声をかけられることがある。それは新しい発見のようである。私もそこに美を感じ取ることが何度もあった。只、一つ残念に思うことは目線の移動である。時にフアッションモデルの方向転換時のそれを思わせるものがある。つまり目線の方向を変える時に目を一旦上に向けてやや放物線を描くように目を移動しながら規定の方向位に移す選手をしばしば見る。これが上位入賞者にやや多い。言うまでもなく次の焦点と方向の位置に最短の直線移動しなければならない筈が気の緩みが出て一つのショーのポーズとなっている。いずれにせよ一般の人が美を認め興味を持って下さることは歓迎である。やはり日本舞踊の手、足、頭の先から表情、体の全てとその過程と決まりによってうちに秘めた繊細な情感が雅に表現される芸術に通じるものを空手の形においてもいかに感じるか。真剣の勝負に入りきった動きのなかに見る者が入り込んで一体となった時、芸術を感じ取ることがあつたのだろう。斯くして形も芸術の域にはいる。いま一つ、それはやはり空手が格闘武術として強いという一般的背景が必要である。この実力を維持し続けられない限り形の一般からの評価も土台を失いかねない。

形というものの性格を考える上で二つのものがあると思う。これは、たまたま全日本空手道連盟(以下、全空)が昇段審査の指定形について従来四流派各々二つであったものをこのほど二形ずつ増やして各流派四形することとなり松涛館としては松涛同門会が全空連と対応して新指定形の案を絞り、その決定後に各挙動の詰めることとなった。2002年春の毎年行われる円覚寺での松涛祭以後、慶、早、拓、法、明葉、及び日本空手が協会の総本部道場に集まって形の勉強会を開きその作業を行って来たが、その間で協会が既に50年近く

的に空手の普及、指導活動が続ける過程で形について貴重な経験を得た事を知った。外国人の弟子たちは疑問を持ち、質問し、それが解明されるまでゆかないと納得しない性格が多く、こう受けたらこう動いてこう突くと言っても、こう決まっていると言っても簡単に納得しない。弟子のなかには勿論熱心な人も、また将来道場を持ってプロになろうという人も少なくなくそれらは更に熱心である。これを繰り返すうちに彼らの意見が理論上、実際上も正しいと思えるものが現実に出てくる。これらを協会の判断と意志で変えてきた、ということであった。そしてその具体的な例も協会の植木八段、専務理事が二、三、実際に組手にして説明して下さった。

この1月(2003)協会の中原会長さんから電話があり協会の本部道場で鏡開きがあるのでいかがですかと来て伺い挨拶を頼まれて私は「協会さんが長い海外での指導の過程で貴重な経験をされた」と上記の実際上観点から形を修正に及んだことを話し、更に「近年、種々の格闘競技が広く紹介されているがこれらに勝つ意を持って空手の研究、工夫をより積極的に進めて欲しい」と挨拶した。実は二年程前、恐らく世界一と思えるこの協会の新道場の道場開きに招待され、乾杯の音頭を頼まれたとき「近ごろk-1など種々の格闘技が日本で盛んに行われるがこれらに負けない意識を持って稽古を積んで下さい」と挨拶し前は「勝つ意識」と言えなことが心残りだったが今回は勝つと言った。

いま一つの形の観点で、船越先生から教えて頂いた通りのものを忠実に守り通す考え方である。「慶應は最初に船越先生から直接形のご指導を受け、本州では最も古い空手の実績を持つ。今日まで忠実に之を守り来たという自負を持っている。」と私は昨年の協会の道場での松涛同門会の形の勉強会で話した。上記は立派な価値を持っていると私は思う。勿論正直に二つの考え方に正当性を思う。琉球で空手の形が造られた時代、造った方々は「唐手」以外は御存知なかったかもしれない。ボクシングの試合も見たことがなかったたれない。形の根本である仮想敵を当時は唐手以外を考えることは不可能であったろう。

時代は移る、進歩か退歩かわらぬか、そして環境も変わる、新しい格闘技がいろいろ現れていることは間ない。空手が武道であれスポーツであれ、種類としては格闘武術であり又、護身術である。新しい武術が生まれるこれからは少しずつ変わったものがいろいろと生まれてくることであろう、そしてやはりこれらに負けるものではないと思う。研究と工夫は稽古の鍛練とともにし続けなければならない。

私はふとこんなことをおもうことがある。若し今、ボクシングやk-1その他を良く知った空手の大家が居て、空手の形を造ったらどんな形を造るだろう。不真面目なようで真面目な大変関心事である。